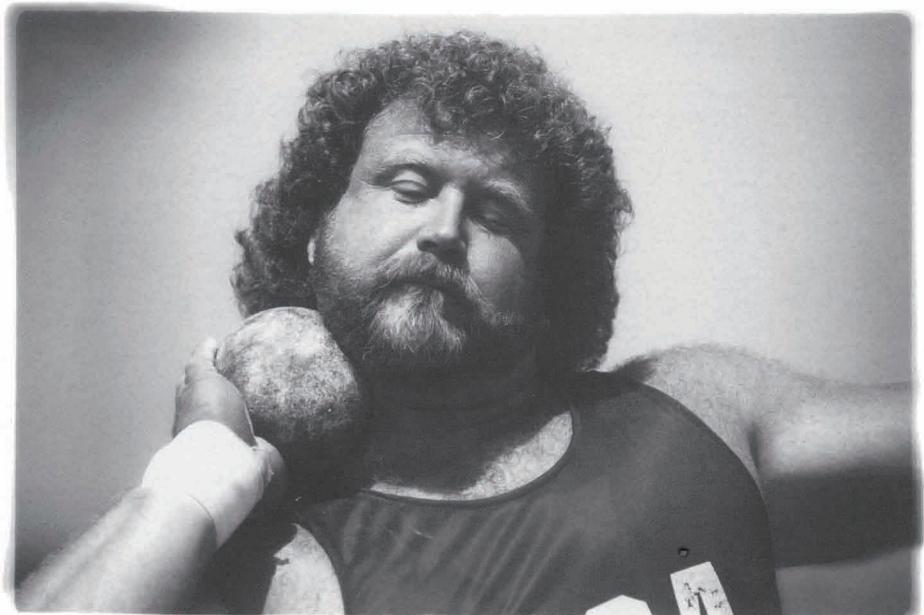


# AJPS AJPS NEWS

ASSOCIATION JAPON DE LA PRESSE SPORTIVE



**新体制へ向けて**

**Interview 「オリンピックの記憶」**

**Photo&Essay**

**Topics/Information**



LEFT ALONE

陸上競技の撮影をしているとフィールドのあちこちで瞑想したり、神に祈っているかのような姿を見かける。

一流だと言われるアスリートたちは他人との競争ではなく己との闘いなのだ。頼れるものは自分だけなのである。

「レフト・アローン」常にひとりぼっちなのかもしれない。



## プロフィール

川津 英夫 Hideo Kawazu  
1940年 東京都生まれ  
1962年 写大卒  
1981年、1984年、1990年、1996年  
銀座キャナルサロンにて個展  
出版 作品集『LEFT ALONE』(彩流社)、他多数  
多摩美大二部講師  
(株)アルテ代表

## 目次 CONTENTS

- 3 Interview
- 『オリンピックの記憶』
- 6 Photo & Essay
- 9 Topics
- 10 賛助会員の皆様より
- 12 新体制へ向けて
- 15 Member's Information

## 巻頭の言葉

中谷 吉隆

1977年に設立された当協会も、早いもので来年には20年を迎えるとしている。フリーランスのフォトグラファーとジャーナリストが中核をなす当協会にとって、いくらスポーツ界が年々隆盛をきわめようと、取材その他で確実な市民権を得られるかは、私たち個人個人のためまぬ努力が不可欠である。

これまでわずかな歩行ではあったが、英知を集め、既成の社会システムに対抗しながら歩んできた。隔年に開催しているAJPS写真展や、1984年から3年間発行したスポーツ写真年鑑、10周年に発行したスポーツ写真集、そして昨年のメンバーズ・インディックス発行などは少なからず当協会を社会に知らしめる役割を果たしたと思う。絶余曲折のあったAJPSへの加入も達成することができた。これらは皆、会員各位の努力によって得られたものである。

さて、今年度から水谷章人会長のもと、会員数も大幅に増えた当協会は新体制となり、心機一転して新しいAJPSに向かって歩もうとしている。会員の意思による新体制のスタートであり、一人ひとりがボランティア精神を今まで以上に發揮し、協力体制を作り上げていかなくてはより良い方向へ進むことはできないだろう。

刻まれた歴史の上に新たな歴史を築き上げていく作業が始まつたわけだが、ぜひ、温故知新の気持ちを忘れないでほしい。今年度から協賛会員になっていただいた各社の方々も、これまでのAJPSの実績にご理解をくださり、会員各位の活動ぶりに対して協力をいただけたことになったのだから、そのご期待に添うためにも相当に戒めて協会運営がなされなくてはならない。

私たちを取り巻く社会環境は日々変化していく、その変化に右往左往することもある。長い経済不況のなか、仕事を継続させていくことが並大抵のことではないのは十分承知している。このような状況だからこそ、フリーランスのフォトグラファー、ジャーナリストが構成する協会として、何を成すべきか、何ができるのかをしっかりと論議していくことが必要であり、今後の発展はビジョンをどう持つかにかかっている。

競技選手の肖像権問題と私たちの著作権問題に関して、どういった態度でこれから臨むかも大きなテーマだ。

新執行部の下、新しい個々の力をまとめ活力あるAJPSに発展していくことを願い、微力ながら私も協力していきたいと思っている。

## INTERVIEW

## オリンピックの記憶

山崎浩子インタビュー

Number 元編集長 設楽敦生氏

現編集長 井上進一郎氏に聞く



photo by S.Akagi

—オリンピッカーという言葉には特別な響きがあるって、我々の記憶の中にストレートに入ってきて、いつの間にかそこには残っているという印象を受けます。

私の場合は、自分が参加した84年ロスアンゼルス・オリンピックが最大の記憶となっているわけですが、例えば、今40~50歳代の人々にとっては64年東京オリンピックが青春の1ページとなっていることでしょうし、各世代によって、それがベルリンであったり、メキシコであったり、またモントリオールやソウルであったりするのだと思います。

今回は古い記憶の中にあるオリンピックとの出会いから、編集者として接したオリンピックまで、その「接点と変化」を語っていただきました。

## 東京にいて行かなかった東京オリンピック

— 最初にオリンピックを意識したのはいつなんですか。

設楽 やっぱり東京オリンピックのアベ。でもほんとのこというとヘルシンキの石井庄八なんだよね、レスリング。

— 誰ですか、イシイ？

設楽 石井庄八知らないの？金メダル取ったのかな。そんとき僕もまだ小学校上がる前だけど。

井上 僕はやっぱり東京オリンピックですよね。重量挙げの三宅兄弟。あれはなんか強烈に印象に残ってます。

— テレビにかじりついでいる感じですか。

井上 テレビが普及し始めた頃ですからね。東京オリンピックは64年でしたっけ。

設楽 そう。そんとき山崎さんいくつ？

— へ？ (笑)、いやあ……4歳ですよ。だから記憶にないんですけどね。

井上 僕も小学校の高学年ですから、円谷とともに自分がリアルタイムで見た記憶なのか、それともその後のVTRとかで擦り込みで入った記憶なのかが分からんんですけど。

設楽 僕なんか文学少年だったから、スポーツ見てる人はバカだと思って、ちょっと冷めた部分があったよね (笑)。だから東京にいて東京オリンピックを見にいかなかつた。だけどあのとき高速道路ができたでしょ。オリンピックというのはとんでもない経済効果があるんだなって思いましたけどね。

— 取材する側になってオリンピックの見方、あるいはオリンピックは変わりましたか。

井上 4年前のバルセロナ五輪の受けをやって、初めて仕事としてオリンピックを見たんですね。でもそれほど深く考えているわけじゃなくって、どういうふうに誌面作ろうか、ということのほうが日々の問題なんですね。毎日毎日現像所に通って何千枚という写真を見て、絵を探してという感じで、それで空いた時間にテレビを見る。非常に疎んじて見方をしてるんですよね (笑)。だから普通の一般的な楽しみ方ってしてないんですよ。



**設楽 敦生（したら あつお）**  
1943年8月22日生まれ。東京都出身  
1968年文藝春秋入社。「オール讀物」「週刊文春」「文學界」編集部などを経て、1980年「Sports Graphic Number」創刊から1984年まで同編集長。1989年から1994年まで同編集長。現在翻訳出版第一部部長。

ソウル五輪の鈴木大地なんかもそうですね。のびのびとやってることが結果的にいい成績につながってる。そういうこれまでとはちょっと意識の違うタイプの選手が出てきましたよね。

## 個人としてオリンピックを楽しめるアスリートに

— その変化はいつ頃からなんでしょうか。

設楽 ソークが象徴的だったのは、この間の冬季五輪でスキー複合の荻原健次が日の丸の旗を持ってゴールに入ったでしょう。あれはもうオリンピック史上衝撃的な事件だったなと思って感動しましたよ。いい時代がきたなと思ってね。というのは、僕らの世代は日の丸っていうことに対して、なんかまだ日本が中国に行って悪いことしてきたとか、そういう意識をひきづってるようにところがあるんだよね。学生運動もあったりして、日々丸に対して複雑な思いがあるわけでしょう。それが個人としてスポーツを楽しんで、その究極がオリンピックであって、その上に国家があるということはとてもいいことだと思うんだよね。昔の人は、まず国家があったわけでしょう。だから彼が日の丸振りかざして滑ったということは実は大変衝撃的なエピソードだと思ふね。裸足のアベベと並ぶような快挙だなと(笑)、ほんとに真面目にそう思った。何かをぶち碎いて、同時に新しいものを作った。スポーツはもっと素晴らしいんだよって、平然と樂々と乗り切った時代がきたなと、僕はすごく感動したね。スポーツはそこまでできるんだって。

井上 表彰台の上で星条旗が上がっているのを見てるアメリカ人の姿は非常に美しくて感動的なんですね。特にアメリカは多民族国家だから、そこで自分はいまアメリカ人として、ここにあるんだということを、切実に感じているんでしょうね。それを見て我々も感動するんですよね。

— 私も鈴木大地さんがソウルで金メダルを取ったとき、その会場にいたんですよ。それで国歌を聞いて国旗を見てたら、な

ま、ある意味ではオリンピックって國威発揚の場でしょ。それが日本なんか、だんだん薄れてきてるという気がしますね。これはちょっとナンバーの宣伝にもなるんだけど、今度プレビュー号で『アトランタ快楽主義宣言』(7月18日発売)というのをやるんだけど、それはオリンピックを楽しもうと、そういう選手が増えてきてるんで、そこに焦点を当てたんです。国のために闘うというのではなくて、自分のためだと。

勝ち負けはともかく、オリンピックを楽しもうじゃないかと、それがひいては強さにつながってくるというところがある。たとえば千葉すぐであり、それからとえばテレビ番組で、跳び箱のランキングを競つたりする番組に体操の現役選手が出てたりするじゃないですか。ああいうのはちょっと前までは考えられないことでしたよね。アマチュアの選手が娛樂番組に出ること自体ね。やっぱり上の方の人の考え方も随分変わってきたんじゃないかなと思います。彼らもああいう番組に出ることによって、一般的な人気も上がって、それを背負ってオリンピックに出る、そういう狙いが上の方にあるということだと思うんですけどね。

— でも怪我したらどうするんだろうと私なんか心配しちゃうんですけど。それによって人気が上がるんでしょうが、その兼ね合いが難しいですね。そういうふうにいろんな変化が見られるのも、時代なんでしょうかね。選手の発言も変わってきましたよね。

井上 そうですね。思ったことを何でも発言する選手が増えてきましたしね。千葉すぐの山崎一彦とともにね。彼らは自分から世界に出ててから、そのへんの意識の違があるんじゃないですか。

設楽 それは大きいね。有森にしてもスキーの複合の連中もそうだけだ、外国での練習が長いじゃない。

— それは変わるきっかけになりますよね。日本の中だけにいると抑圧されてしまって。

設楽 普通だったら自分の上に学校があつたり、体協があつたり、国があつたりするじゃないですか。そういうのがスパンと切れてる。荻原なんかいい意味で日本人離れてるとこあるしさ。

— 荻原選手たちが、英語でインタビューを受けたと聞いたときには、やっぱりショックでしたね(笑)。日本も変わってきたなと思いましたけど。

井上 前園なんかもね。チヌニアでのオリンピックの合宿では、英語でインタビュー受けているんですよ。それからパソコン



**井上 進一郎（いのうえ しんいちろう）**  
1953年1月5日生まれ。福岡県出身  
1975年文藝春秋入社。「週刊文春」「文學界」編集部などを経て1988年から1993年まで「Number」編集部。1996年4月より同編集長。

も勉強してる。それはやっぱり、これから自分は世界に出てやるべきないと。そのためにはこういうことやったといふのがいいだろうという彼なりの考に基づいての行動なんですね。

## 情報網の発達により進化するスポーツ愛好家

— オリンピックの報道についてはどう思いますか。

設楽 日本のスポーツ報道はきちんとやってると思うよ。フィールド以外のことを報道し過ぎてはみ出しているところはあるけど。でもレベルが高いから、もっと高くしたら面白いと思うね。もっと競技自体の面白さとか、ほんとのドラマとかを取り上げれば、読者はいるからね。僕がナンバーの編集長時代に最初に

NBAを取り上げたら、ものすごくよく売れた。そしたらすっごいおかしかったのは、間違いを指摘する投書があつたわけ。それが30いくつもの福島の女性なんだけど、とにかくものすごく詳しい。NBAのどっかの選手の大学時代の成績が間違ってるとかなんとか、僕らがいくら調べても分からなんだよね(笑)。で、その女性に電話したんだよ、何でそんなに詳しいのか

と。そしたら7年ぐらい前にBSでたまたまNBAを見て面白くて、いろいろ雑誌を取り寄せてみたけど、どこにも取り上げてない。それでしょうがないから英語を勉強し始めるんだよね。レイカーズか何かのファンで、ついにいきなり福島からロスとかニューヨークとかに行っちゃうわけ。それでNBAに関する本とか買ひ集めて福島に持って帰って勉強する。その人は東京に来たこともないのに、いきなりニューヨークに行っちゃうんだよ。つまり福島からニューヨークに文化が直接飛んでる。それぐらい深い人が昔からいるからね。だからオリンピックももっと深く深くやるべきだよね。

— いまは以前よりもっと、衛星放送やインターネットとかで情報網が発達して、読者のほうが進んでるかもしれませんね。

設楽 日本の読者はすごくインターナショナルだし、スポーツ愛好家は高度に洗練されてるけど、報道の方が遅れてる感じがするね。オリンピック報道はどうしてもナショナリズムにいつちゃうじゃない。それも別にかまわないけど、カール・ルイスだって、何故復活できたかっていう報道はやってないもんね。すごいことなのに。それからカナダに住む日本人の男の子が9秒台出したんだよね。絶対ウソだと思ったらほんとらしいんだけど。

井上 カルビン・スマスっていうコーチが優秀な子を集めてトレーニングするような所があるんだけど、そこの子で、ルイスを負かしたらしいですよね。デビューを待ってたんだけど、怪我をしたらしいんですね。そういう話はいっぱいありますよ。



設楽 もっと踏み込んでそういう報道しても、読者はついてくるんだよね。それはオリンピックを2倍楽しむ法になるんじゃないかなと思う。

— 報道の仕方は難しさは感じませんか。

井上 結局は作る側からしたら、無責任な言い方になるけど、面白いものを作るということになりますよね。

設楽 僕も難しいとは思わない。一緒に面白がってればいいんじゃないの。それぞれの感性で面白がってれば。それにつき来るよ。

— 最後にオリンピックについて何か言いたいことがあつたらどうぞ。

設楽 能力の限界を試すのがオリンピックだから、プロだろうがアマだろうが参加すべきだとぼくは思うね。実はサッカーはワールドカップがすごいんだ、なんて言うのはやめてほしいね(笑)。オリンピックはオリンピックで、最高の技量でやってほしい。だからNBAの連中がドリームチームで出たというのは、快挙だと思うし、最高の技術を持ってるやつが出場するのがオリンピックだと思うしね。日本のサッカーチームがメキシコで銅メダルを取ったのは、実はあまりたいしたことはないんだよ、サッカーはワールドカップが第一だから、なんて言われても、見るほうからしたら、はっきりしてくれって言いたいよね(笑)。

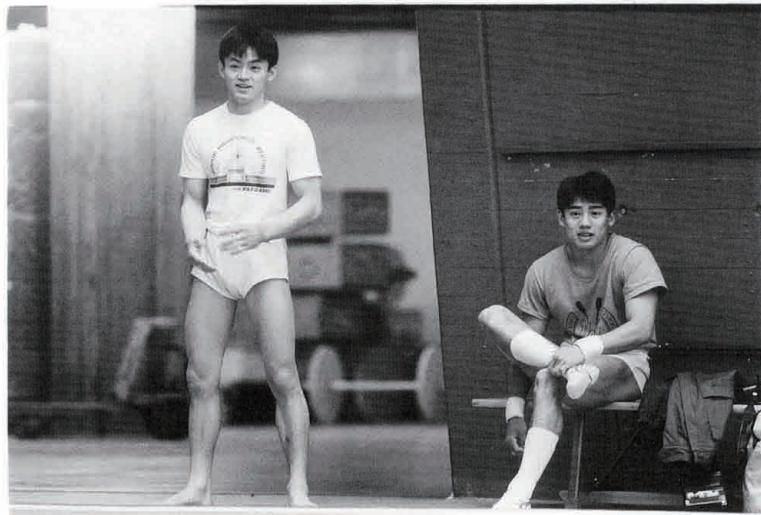
「ミュンヘンへの道」と題されたテレビ番組が放送されていたのは何年前のことだろう。ミュンヘンオリンピックを目指す男子バレーボールチームのメンバー一人ひとりを浮き彫りにしたその番組は、私に強烈な印象を与え、初めてオリンピックというものを意識した。しかし、自分自身がオリンピックという華やかな舞台に立つとは夢にも思わず、年月が過ぎ、そしていつの間にか私は、48年ロス五輪の真っ只中にいた。選手宣誓を間違えたエド温・モーゼス、怪我をしながら金メダルを勝ち取った山下康裕、短距離走、走り幅跳びの4冠を制し、驚異的な力を見せつけたカール・ルイス。あれから12年、東西間の大きな壁が崩壊して勢力地図が書き換えられてもなお、カール・ルイスはいまだ超人ぶりを發揮し、そして、私は再び、外側からオリンピックを見ようとしている。何が変わり、何が変わらないのか。この夏、シナリオのないドラマが、またひとつ歴史を刻む。

インタビュー写真：兼子慎一郎

# 池谷君と西川君

写真・文 藤田 孝夫

photo&text by Takao Fujita



昨年の10月、私は靖江で世界体操を取材していた。ある日、遅めの昼食を食堂でとっていると、キャップを目深にかぶったスポーティーな格好の男が入ってきた。彼は私の隣のテーブルに座ると、「ご無沙汰です」と声をかけてきた。池谷だった。私がまだ一人身だというのに、もう一児のパパである。今日はテレビの解説で来たらしく、隣のUFOのような体育館では、かつての同僚西川が、これから演技に挑もうとしていた。

かつて二人は、「池谷くんと西川くん」と、セットで呼ばれていた。そんな二人に初めて会ったのは、もう8年も前の事になる。ちょうどソウル五輪を控えて国内が盛り上がっている頃だった。それまで84年のロス五輪以降、日本の体操界は低迷していた。アジア大会では韓国に敗れ、世界選手権の団体でも表彰台に乗る事は無かった。そんな中で生まれた日本男子体操史上初の高校生代表選手に、国民党もマスコミも、そして私も期待を寄せた。

実際、ソウル五輪では二人の若さと明るさがチームに血を注ぎ、見事銅メダルを死守するに至った。合宿にも何度か足を運んでいた私は、特別な想いでシヤッターを切った。おさえ難い緊張感と興奮に酔ったことを、今も鮮明に憶えている。

ソウル五輪直後、国内はちょっとした池谷、西川フィーバーに湧いた。それをかいくぐるように、二人は冬の欧洲遠征に出た。私も同行させてもらった。2週間で3カ国（3大会）をまわる遠征は、競技会というよりは興業といった趣きだった。だ

から彼らの演技そのものはあまり憶えていない。ただ土産物を池谷と一緒に漁ったことや、レストランで夜中の一時まで西川と喋った事は、よく憶えている。あの時は本当に楽しかった。彼らが体操に取り組む時のひたむきさと、普段着の時に見せるあどけなさとの間で、私は心地よく揺れていた。

二人はこの後、なぜか当然のように日体大と日大という別々の進路を進み、バルセロナまで突っ走った。そしてソウル五輪以上の成績を残して、池谷は芸能界へと進んでいった。

今年1996年は、西川にとって3度目のオリンピックの年、になる筈だった。しかし5月の最終選考会で西川は代表からもれた。自由でのあん馬の失敗が致命的だった。皮肉にもソウルで団体銅メダルを決めた種目が、西川のあん馬だった。彼はがっかりした様子も見せず、記者の質問に気丈に答えていた。私は声をかけられなかった。

池谷が芸能界入りを決めてからしばらくして、雑誌のインタビューで西川に会う機会があった。「体操をやめようとは思わないか」と聞くと、「僕は体操で認められている人間ですから」と答えが返ってきた。

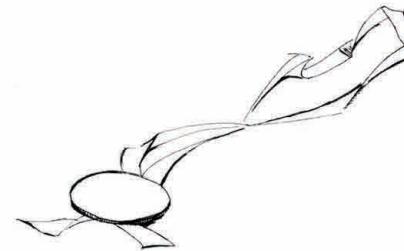
アトランタを逃した今も、西川の口から「引退」の二文字は出てこない。TVのチャンネルをひねると、池谷が持ち前の明るさを發揮している。

オリンピックの向こう側に、池谷は何を、西川は何を見つめたのだろう。

# 究極のスポーツ観戦・オリンピックは招く

文 杉山 茂樹

text by Shigeki Sugiyama



サッカー75%、その他の競技25%というのが現在の僕のだいたいのスタンスだ。つまり、スポーツという枠の中で、サッカーに一番の関心を寄せているわけだが、それだけに今回の五輪への対応については、僕を大いに悩ませた。

今回の日本代表（23歳以下）はアジア予選を勝ち抜き、メキシコ大会以来28年ぶりに五輪本大会出場を果たした。それは、サッカー愛好者にとっては實に喜ばしい出来事であるのだが、アトランタ五輪のサッカー競技はご存じの通り、アトランタ以外の（それも、そこから数時間の移動をする遠隔地にある）会場を舞台とする。日本の戦いぶりをチェックしに出かけるとその日のうちに別の競技を観戦することは物理的に不可能となる。五輪サッカーチームを一覧表しようとすると、その他の競技はほとんど観戦取材できないという事態に陥るのだ。

サッカーを見るか、その他の競技を取るか、白か黒かの決断を強要されたのだ。言い換れば、僕に対してスポーツライターなのかサッカーライターなのかポジションをハッキリしろと迫っているのも同じである。これは75%対25%のスタンスで動く僕にとっては困った問題であった。

28年ぶりの五輪予選突破の瞬間に立ち合い、選手に対し少なからずの情けまで抱いてしまっている。サッカーへ行きたいのはやまやまだが・・しかし、結局僕は25%＝サッカー以外を選択した。いわゆる“五輪”的魅力が勝ったのである。

サッカーというスポーツは（当り前のことだが）専門競技である。それ専門の店に行って味わう例えば寿司のようなものである。対して、何十種類の競技がごちゃまぜになって同居する五輪は、会席弁当、松花堂弁当のような上等な幕の内といった趣を持つ。

つまり、五輪の魅力はそのバラエティの豊富さにあるのだと僕は思う。午前中は飛び込み、午後イチからは体操、夕方からは水泳、そして夜は柔道・・。（冬季でいえばボブスレー、フィギュア、スケート・・）。それぞれの競技の魅力は（あくまでも僕の尺度だが）サッカー（つまり寿司）には劣る。だが、16日間の間にそれが何十種類と絶え間なく登場する様に、少なくとも



illustration by M.Nakada

# EURO'96に思う

文 戸塚 啓 text by Kei Totsuka



photo by S.Akagi

6月のロンドンを訪れたAJPSのメンバーはカメラマン6名、記者2名。2002年のW杯開催国決定で日本でもなじみの出てきたUEFA(ヨーロッパサッカー連盟)が主催する、ヨーロッパ選手権の取材のためだ。

とりわけカメラマンにとっての今大会は、これまでストレスとの猛烈な背中合わせと聞いていた。客観的にみて大会と接点の薄い日本人プレスは、あらゆる意味でプライオリティが低い。会場が複数の予選リーグはともかく、決勝トーナメント以降は確率との勝負だったとか。実際に予選リーグ終了とともに帰国した方も何人かいた。

ところがビックリ。開幕戦で驚きのゴー・サインを受けた予選リーグでは、訪れた8会場すべてでカメラマンも取材可能に。ウェイティングでヒヤヒヤするときもあったが、過去の辛酸はおおむね無関係だった。僕自身、106番のウェイティングでチケットをつかむ幸運も体験したし、準決勝・決勝ともプレッセンターのテレビではなく記者席で取材できた。「ま、いろんな経験をしてきな」と諦め状態だった編集長には自分の勲章のように報告したもの、観戦可能なすべての試合をカバーできた僕はラッキーだった。

準々決勝、準決勝のうち4試合がバッとしたままPK戦にもつれるなど、大会そのものにはかなりガッカリした。

その反面、ここまで取材できたヒントがフィールドにあったような気もある。審判のジャッジがFIFA(国際サッカー連盟)主導のW杯と微妙に違うのだ。2002年W杯開催国決定で明らかになった両者の対立が、レフリング一つにもFIFAと一線を画したいUEFAの方向転換につながった様に感じたのは私だけだろうか? 緩やかだった取材規制の原因は、プレスとの友好関係を保ちたいUEFA内の配慮にあるのではないだろうか。だとすれば、次回2000年の大会でも、ある程度の取材が期待できそうだ。

初めての長期出張による過緊張を和らげてくれたのが、梅雨の日本とは対照的に日差しに恵まれたこと。日本代表の遠征で滞在した去年に比べると格段に温かかった。

青空が突然ロンドンを去ったのは、イングランドが準決勝で負けたその夜から。悪名高きフリガソウではなく、ハートフルな男たちの集団だった地元サポーターの涙のような雨が、僕にはすごく印象的だった。



AIPSとケルンスポーツ大学のスポーツジャーナリズム専科では、1996年の国際スポーツイベントにおいて、『スポーツジャーナリズムインターナショナル』と題したアンケートを実施しています。EURO'96のメディアセンターでは、英、仏、独、西、の4か国語のフォームがありました。今後、国際大会にお出かけになる方々は、各会場のプレスセンターでアンケートの有無をチェックしてみてはいかがでしょうか。



Nikon F5



E100S



## ニコンユーザー待望のF5発表

次世代のF、ニコンF5の10月発売が決定した。ニコンのフラッグシップカメラにふさわしく、考える機能をすべて搭載したともいえるほどの高性能カメラが出現した。

### 5点測距・新オートフォーカス

5つのオーカスエリアを十字にならべたことによりAF使用時のフレーミングの自由度が大幅に拡大したとともに、合焦の精度、早さともに向上した。オーカスエリアはボディ背面のセレクターで任意に選択することもできるうえ、被写体がオーカスエリアをはずれても他の素子がバックアップしてピントを検出するダイナミックAFも可能。



## 「森羅」あらゆる撮影シーンに対応する高性能リバーサルフィルム コニカより発売

今年の3月に発売されたカラーリバーサルフィルム。森羅万象を絵にするという意味のネーミングどおり、あらゆる撮影シーンに対応する。

明度・彩度の向上に加え、すぐれた色分離に

より、被写体の持つ色の個性を忠実に再現する。黒のシマリがよく、コントラストも鮮やか。粒状性・シャープネスも大幅に向上了した。

また、ダイレクトプリントとの相性も良い。

色温度変化によるカラーバランスの変動が小さくなるように設計されているため、人工光・ミックス光に強い。実効感度が100あり、+1.5~-2.5絞り増感まで可能。さらにラボ現像処理における変動に強い。

コニカクローム森羅は、さまざまな条件下で被写体を追うスポーツシーンの撮影においても威力を發揮する。

名称：コニカクローム森羅 SINRA 100 ハイグレード（略号：SRS）

感度：ISO100

データライトタイプ

現像処理：CRK-2-61/E-6

135サイズ24、36枚撮り、

120サイズ12枚撮り

秒間8コマのフィルム給送

予測駆動

オーカスに対応しながら最高秒

間約8コマの高速フィルム給送が可能。(ニッ

ケル水素電池MN-30使用時) しかもクイックリターンミラー方式により、ファインダーの像消失時間は極めて短く、連写中でも被写体を確実に追い続けることができる。

3D-RGBマルチバターン測光

測光素子はRGBをそれぞれに対応し検出できる。これにより、明るさのみの情報に、Dタイプ以降のレンズによる距離情報、そして色情報までが加わり、より広範囲のシチュエーションに対応できるAEになった。また、オートブレケティングや、1/300秒でのTTL高速シンクロも可能。

その他、ニコンらしく耐久性、防水、防塵性には優れ、手動のフィルム巻きもドレノブは先代を継承してくれた。

秋に発売予定の超音波モーター搭載のレンズとの組み合わせも楽しみだ。

ニコンF5 ボディ本体(ストラップ付)

325,000円

AFニッコール50mmF1.4 D付

360,000円

## 日本コダックから感度100の新しいプロ用リバーサルフィルム

日本コダックから、最高2絞り相当までの卓越した感特性を持つ、感度100の2種類の新しいフィルム「コダックエクタクロームプロフェッショナルE100Sフィルム(標準タイプ)」と「同E100SW(暖色系)」が発売された。

このE100シリーズフィルムは粒状性にすぐれ、シャープネスが極めて高く、自然な鮮やかさを持つ。また設計や製造に改良が加えられ、このような特性が向上した。

- ・比類のない肌色の調子再现
- ・最高2絞り相当までの卓越した感特性
- ・傑出した処理特性
- ・優れた相反則不軌特徴
- ・フィルム間の品質の均一性

特に高速シャッターが求められるスポーツシーンの撮影においては、感度2絞りまで可能なフィルムはたいへん使いやすいフィルムといえる。相反則不軌特性においても、10秒から1万分の1秒までフィルターの補正は不要。

名称：コダックエクタクロームプロフェッショナルE100Sフィルム

コダックエクタクロームプロフェッショナルE100SWフィルム

7月10日より発売中

感度：ISO100

データライトタイプ

現像処理：E-6

135サイズ36枚撮り

(希望小売価格1,100円)

120サイズ (希望小売価格595円)

220サイズは8月1日、

4×5サイズは9月2日発売予定

# 賛助会員の皆様より

お知らせしましたとおり、今年度より7社の皆様に賛助会員としてご協力いただけることになりました。発足20年足らずの当協会に御理解をいただき、又、今後の発展のために快く入会していただきました。各社の担当窓口の皆様よりコメントを頂戴いたしましたのでご紹介いたします。

(五十音順)

# PENTAX

## 旭光学工業株式会社

窓口：消費者サービス部  
お客様相談室プロ担当  
住所：〒104 東京都中央区  
銀座西8-10  
TEL：03-3572-6489  
FAX：03-3571-2650  
担当：室長 瀬戸保延  
主任 佐々木淳二

# Canon

## キヤノン販売株式会社

窓口：キヤノンサロン  
住所：〒104 東京都中央区  
銀座5-9-9  
TEL：03-3573-7821  
FAX：03-3289-0379  
担当：田村民雄

# Konica

## コニカ株式会社

窓口：プロ感材営業部  
住所：〒163-05 東京都新宿区  
西新宿1-26-2  
新宿野村ビル  
TEL：03-3349-5098  
FAX：03-3349-5085  
担当：柴 久之

# Nikon

## 株式会社ニコン

ニコンカメラ販売株式会社  
窓口：プロサービスセンター  
住所：〒104 東京都墨田区  
吾妻橋1-23-1  
(アサヒビル吾妻橋ビル)  
TEL：03-5610-5151 (代表)  
FAX：03-5610-5159  
担当：所長 西牧章一

昨年、皆様の窓口であるサービスセンターが、銀座から浅草に移りました。これまで以上に広いスペースとなり、写真サロンやちょっとくつろげる場所も設けました。まだおいでになっていない方は是非お越しください。

会社としましても受け付け窓口、サービス等の機能がまとめられましたので、ニコンとして、より中味の濃い情報が発信でき、皆様のお話もししっかり伺うことができるかと思います。コミュニケーションを密にし、皆様に良い仕事をしていただくための良い製品を作りたいと考えております。

そして、待望の最高級カメラ、F5が10月に発売になります。スポーツ写真家の方々にお役に立つ機能をふんだんに盛り込んだカメラです。

また、ニコンではアトランタ五輪にサービス・デボを設置します。

メンプレスセンター1F、インターナショナルスポーツプラザ3F（登録受け付けはこちらで行います）の2カ所です。どうぞご利用ください。

# Kodak

## 日本コダック株式会社

窓口：P&PI事業部  
PI営業部門  
住所：〒140 東京都品川区  
4-7-35 御殿山森ビル  
TEL：03-5488-2152  
FAX：03-5488-4511  
担当：東部営業一部 小林純

オリンピック開催というタイミングの良い年に声をかけていただきありがとうございます。

日本コダックは、様々なスポーツイベントにも協力させていただいているので、私どもから多くの情報がご提供できるのではないかと思います。

アトランタ・オリンピックでも、MPCでオフィシャルカメラマンの方へのサービスをいたしており、98年長野冬期オリンピックでもオフィシャルスポンサーとしてのサービスを予定しております。今後、皆様との接点を持つ機会も多くなることでしょう。

7月10日にはE100Sというニュータイプのフィルムが発売されました。このフィルムは感特性を大幅に改良した商品であり、急に高感度フィルムでの撮影が求められる事もあるスポーツ写真家の皆様方には、常用フィルムとしてご使用いただけること思います。是非、お試しください。

賛助会員として、わずかながらご協力させていただき、今後とも宜しくお願ひいたします。

# FUJIFILM

## 富士写真フィルム株式会社

窓口：プロフェッショナル写真部  
住所：〒104 東京都港区  
西麻布2-26-30  
TEL：03-3406-2068  
FAX：03-3406-2140  
担当：辻徹  
庄和也

アトランタオリンピック開幕、2002年のワールドカップサッカーなどスポーツに関する話題がはなやかです。

スポーツ写真を撮られている方々とお話をさせて頂くと実に楽しいし、興奮します。それも人間の究極の姿をとらえ、常に最高の被写体に立ち向かっているからでしょう。

どの方にも共通していることは、スポーツが好き、写真が好き、人間が好き、という人ばかり。。。実に羨ましいかぎりです。

アトランタオリンピックでは8月5日まで、フジフィルムサービスセンター(FSC)をメインプレスセンターの近く(161 Spring Street)に開設し、リバーサル現像(CR-56、E-6)およびネガ現像(CN-16、C-41)サービスを行います。

お陰様で富士クローム・Velvia、PROVIAシリーズ、フジカラーSUPER G ACEシリーズともご好評を頂いています。さらに品質管理、処理体制など万全を期し、皆様のフォローをしっかりとやってまいります。

皆様のますますのご活躍を期待しながら、今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。

# HCL

## 株式会社堀内カラー

窓口：関東統括部  
住所：〒101 東京都千代田区  
神田小川町2-6-14  
TEL：03-3295-1081 (代表)  
FAX：03-3295-2353  
担当：課長 森原正史

日頃より、多くの会員の方にご利用いただきありがとうございます。スポーツの報道に携わる方々の、様々なニーズに対応できるシステムと実績を持っているラボです。これからも有効にご利用いただけたらと思います。

さらに、最近では新しいビジネスとしてデジタル画像を取り扱っており、個人レベルでは不可能な高品位の入力から、フィルム、印画紙への出力が増えております。また、デジタルフォトシステムという機器の取り扱いも始めましたので、是非お問い合わせください。

日本スポーツプレス協会は、スポーツ写真といふ部門においては日本を代表される方々の集まりですから、これからカメラマンを目指す若い入達にもシンボルになるような仕事をしていただければと思います。また、スポーツカメラマンを育てるという活動や社会に対して影響を与えるされるような活発な活動を是非目指してください。そのためには、堀内カラーとしてもできる限り協力させていただきます。

## 新体制へ向けて

# 会長就任挨拶

水谷 章人 Akito Mizutani

この度、役員の選出方法改正後に行われました選挙で会長に選出され、心ならずもお引き受けしました。皆様のご協力を仰ぎ、微力ながら協会の発展のため努力して参りたいと思います。

-AJPS- 日本スポーツプレス協会が産声をあげてから、本年で19年を迎えます。「スポーツジャーナリストの職能を確立擁護し、表現および報道の自由の確保につとめ、もって日本のスポーツ界の健全な発展に寄与する」を旗印にスタートしました。これまで、発足当時の根本理念を忘ることなく、個人の資格で参加した会員一人ひとりが責任と信念をもって活動してきたと確信しています。

そしてこれからも、我々はスポーツにおけるプロフェッショナルのフォトグラファー、ジャーナリストであり、眞のプロフェッショナル集団であることを再度自覚し、歩んでいきたいと思っています。

発足当初 17名であった会員も年を重ねるごとに増し、今期 5名の新入会員を迎えて 77名までになったことも大変喜ばしいことです。

19年の足跡を顧みると、長い道のりではありました。発足当時の目的の一つであった AJPSへの加入が実現し、AJPS プレスカードを取得することができます。

本協会もこれを機に大きく飛躍し、運営に精進して行かなければなりません。会員個人が、AJPSの会員としての責任と自覚を持ち、根本理念を再認識し、全員が運営に参加している気持ちで協会

ンバーズインデックス制作等の事業活動を通じて社会にアピールし、当協会の存在を認知していただけたと思っております。

AJPSの今後を考えると、会員相互の親睦を計り、活発で行動的な協会にするためにより一層の文化事業を展開させて行くことが大切です。

タイミングよく来年度は 20周年を迎えます。今年度中より準備委員会を設け、コンテスト＆公募写真展の開催、写真集の制作、写真教室等を、企画、実施していく予定です。

現在、フォトグラファーで活躍している会員が多くをしめておりますが、ジャーナリスト分野で活躍している方達にもより強く入会を働きかけ、増員を果たし、活動を円滑に広めて行かなければならぬとも考えています。

また、旭光学工業(株)、キャノン販売(株)、コニカ(株)、(株)ニコンとニコンカメラ販売(株)、日本コダック(株)、富士写真フィルム(株)、(株)堀内カラーラーの各社の皆様には協会の活動にご賛同をいただき、本年度より賛助会員として入会していただきました。関係各位の皆様には深く感謝申し上げます。

本協会もこれを機に大きく飛躍し、運営に精進して行かなければなりません。会員個人が、AJPSの会員としての責任と自覚を持ち、根本理念を再認識し、全員が運営に参加している気持ちで協会

のために力を注いでほしいと思います。

われわれの職業は、選手あっての世界です。選手との人間関係を大切に、最低限のルールは守りモラルある行動と言動を持って仕事をしていきましょう。

1977年 AJPS 創設時から 18 年間、会長、副会長として協会発展のためにご尽力くださいました、中谷吉隆氏、岸本健氏の御苦勞に対して、協会員を代表して厚くお礼申し上げます。岸本氏には協会創設以来、協会事務所をお世話いただきました。重ねてお礼申し上げます。

最後になりましたが、協会発展のため、関係各位の皆様には今後ともご指導ご鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。



水谷章人

1940年、長野県出身。東京総合写真専門学校卒。以降、スポーツ専門のフリーランスフォトグラファーとして現在に至る。79年(株)スポーツアイ設立。写真展を13回、写真集「極限の形象」をはじめ、スポーツ図書「水谷章人のスポーツ写真入门」等多数出版。88年(株)マイスポーツ出版代表。81年、第12回講談社出版文化賞受賞。

## 事務局より

会長の挨拶でも触れられているように、当協会は今年度新しい体制となる3期目を迎える、事務局も移転になりました。急ぎ移転、引き継ぎの作業を行ってまいりましたが、新年度から1ヶ月ほどの時間がかかり、皆様には大変ご迷惑をおかけしました。新事務局は、文京区江戸川橋で6月1日より活動を開始しました。入会案内、住所録等必要な情報書類の整備も出来つつあります。事務局としては、出来る限り開かれた事務局を目指しております。しかし、諸々の事情で事務局に専任者を常駐させるところまでは至っておりません。そこで皆様には、以下の要領で事務局を活用して頂くようお願い申し上げます。

◎月曜日と木曜日の12時～15時は原則的に事務局にあります。◎その他の場合は、事務局留守番電話に用件を録音していただきか、FAXを送信してください。毎日1度は用件を確認していますので、翌日に用件が足りるようになります。◎即日又は緊急に連絡が必要な場合は、総務小林(事務所/03-3944-7719、携帯電話/030-22-03805)に遠慮無くご連絡下さい。

事務局は、皆様の英知、信念、希望、そして協力が必要です。本年度から7社が賛助会員として参加して下さったの機に、より効率的で開放的な事務局にすぐ摸索を重ねながら鋭意努力をする所存です。

### 財務

総会にて平成7年度決算が承認されました。なお、会計の引き継ぎにあたり、未収金の累計による処理上の問題を理事会にて討議し決定いたしました。納入状況については別紙にてご案内いたします。

また、協会事務所の移転、役員の改選により、銀行口座の番号が変わりました。今後、会費の納入等は下記の新しい口座でお願いいたします。

**【新口座番号】**  
富士銀行・四ツ谷支店(241)  
普通・1895747  
日本スポーツプレス協会  
水谷章人

これから大切な会費を預かる財務として、財政・経理の健全化、会費などの振込についての簡略化・改善など計っていかたいと思っています。

### 総務

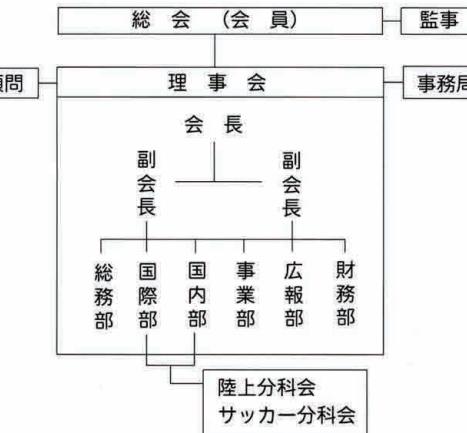
第3期目、20周年を迎える本会の総務理事という大役に責任を感じます。さまざまな個性や感性を表現している会員を、スポーツ・ジャーナリズムと言うテーマで集約する事で個々の活動を大きうねりに出来ればと考えます。

新事務局の設置から始まった今期ですが、雑事の中に個々の会員の権利と義務が埋もれぬ様に細心の注意を配る事、それが総務の唯一の仕事であると思います。

本年はその第一歩として、  
1) 事務局/総務と会員間の情報コミュニケーションの確率。  
理事会に対して、会員(賛助会員を含め)の意志・意見の反映。

2) 効率的経済的なネットワーク作りに向けての模索と実現。  
以上の2点を徹底して実行して行きたいと思っています。

今期理事会は、『内外に向けての活発な活動』をテーマに各理事を中心に動いています。会員各位の力強い協力のもと、息切れぬよう頑張ります。



### 日本スポーツプレス協会 1996年度役員

会長：水谷 章人

副会長：川津 英夫  
副会長：薬師洋行

顧問：中谷 吉隆

監事：岸本 健、山田 真市

総務部理事：小林 洋  
財務部理事：北川 外志廣  
事業部理事：大河原 弘  
国内部理事：松本 正  
国際部理事：富越 正秀  
広報部理事：赤木 真二

現在、私ども事業部会は梁川氏、大下氏と私、3名で本年度の事業企画原案を検討し実現化するよう行動を起こし始めたところです。事業部の行う事業によって少しでも当協会が各方面に認知されればと考えております。本年度の事業計画は来期に訪れる、当協会の20周年行事の準備年度と考え全力で企画原案を煮詰め事業としての成功を考えております。今後、各方面的協力、ご助言をお願いすると思いまでのよろしくお願ひいたします。また、現在3名で運営しておりますが、我こそはと積極的に参加していただける方がおりましたら事務局まで御一報ください。また、事業部で気が付かない事業企画がありましたら御助言ください。

## 国内部

現在、国内部より AJPS として取材を申請している競技は、陸上競技です。国際大会、全日本選手権、国民体育大会、インターハイ、中学生大会などは AJPS として取材が可能です。その取材方法に関しては陸上分科会の報告をご覧ください。

また、9月の TOTO スーパー陸上、11月の東京国際女子マラソン、国際千葉駅伝等は、事前に AJPS から取材申請をする必要があります。希望者は、大会の2週間前までに当協会の陸上部会へ申込をお願いいたします。

国内スポーツの情報、要望などをぜひお寄せください。

## 国際部

国際部は海外のフォトグラファー、ジャーナリストとの交流、また、海外での取材等に関するインフォメーションの収集を積極的に行っていきたいと考えています。

今期のメンバーとして、海外の取材経験が豊富な3名が加わり、よりスマーズな運営が可能になりました。また、当協会の前国際部理事で現副会長の薬師洋行氏をはじめ、欧州に活動拠点を持つ倉井美行氏、海外のサッカーリポートに詳しい清水和良氏など、海外に強い諸氏の貴重なアドバイスを参考に、皆さんのご意見を反映させながら、海外プレスとのコミュニケーション等を図っていく所存です。

## 広報部

今年、広報委員が取り組まなくてはならないテーマは、皆様がお読みの AJPS NEWS です。『広報誌』と言う意味合いの印刷物。

『AJPS NEWS』を年に2回発行し、それとは別に会員向けのNEWS を2ヶ月に1回お届けしよう、と計画しています。

各々まったく個々の仕事をやりながら、どこまで情報を集め、それをどこまで誌面に反映させられるか? このマルチメディアの時代に、われわれの作業はどこまでデジタル化できるのか?などなど広報委員4人だけでは把握しきれない問題が山積みです。

今後の誌面展開もさることながら、ハードソフト両面にわたり、皆様のご協力、ご鞭撻をお願いする次第です。

## 陸上分科会報告

## スチールカメラ取材用ゼッケンについて

築田、藤田

6月4日、代々木第二体育館において、(財)日本陸上競技連盟による今年度の取材に関しての説明会が開かれ、次のことが決定いたしました。

・カメラ取材用ゼッケンは3種類(赤、ダイヤイ、緑)

・ダイヤイ色は日本陸上連盟主催の大会、基本的には国立競技場で開催する競技会において、アウトフィールド及びスタンドでの撮影ができます。東京以外での陸上連盟主催競技大会での使用については、その都度連絡があります。

・国民体育大会陸上競技、全国高等学校総合体育大会陸上競技についても、同様にダイヤイ色カメラゼッケンを準備し、配布、使用等については開催地陸上競技会の報道係が、実行委員会の報道係と共にその任にあたります。

なお、陸上競技連盟主催のマラソン大会等道路競技に関しては実行委員会の運営要項に従ってください。

・赤色ゼッケン着用のカメラマンのみインフィールドでの撮影ができます。スチールカメラマン用としては24枚用意されています。赤色カメラゼッケンの配布については、各協会幹事者の協議により分配されます。

・インフィールドで三脚の使用はできません。また、インフィールドでは座って撮影してください。

・表形式の撮影は、赤、ダイヤイ色いずれの

ゼッケンでも可能ですが、記者の方はできません。また、表彰台近くの立ち入り禁止区域には入らないでください。

・競技場では報道受付で必ず受付をしてください。

・ダイダイ色ゼッケンは基本的に、競技場報道受付で毎日受け付けたものに配布してもらいます。

本年度、当協会に対して赤色ゼッケンは2枚(No.16, 17)配布されています。

赤ゼッケンの振り分けについては、従来通り、現場に取材に来たカメラマンで調整することになります。ただし、全体会員登録のため、事前に取材希望の有無をお知らせいただければ幸いです。基本的に赤ゼッケンは、事務局管理(担当 藤田)になります。

尚、(財)日本陸上連盟の事務局、砂原氏が昇進のため、報道担当は関 幸生氏になりました。

## サッカー分科会報告

今井、菅原、伊藤

サッカーの取材、写真の使用に関する情報交換と交渉を目的としてスタートしたサッカー分科会も5年目を迎めました。

現時点では、取材に関する問題に急務はありません。国内のJリーグ、JFL、Lリーグの取材は、媒体を明記した事前申請書で取材は可能ですし、サッカー協会主催の代表チームの試合に關しても、同様の申請で許可がおります。サッカー協会からは各種のインフォメーションも随時送っていただき、良いコミュニケーションがとれていますので、今後もより良い関係を続けていきたいと思います。

現在 AJPS メンバーによる、Jリーグオフィシャルカメラマンの人数は全てで5名(チームオフィシャル4名、Jリーグフォト1名)です。

## AJPS

## 平成8年度予定

理事会の開催(月1回)  
総会の開催(5月及び12月)  
懇親会の開催(5月及び12月)  
協会20周年事業・準備委員会の設置  
第一回公募展委員会(7月より毎月)  
日本スポーツプレス協会会報発行

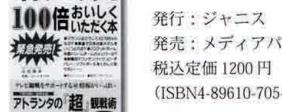
## Member's Information

## 新刊案内

## オリンピックを100倍おいしくいただく本

スポーツジャーナリスト 白鷹隆幸

写真: フォートキシモト



発行: ジャニス

発売: メディアバル

税込定価 1200円

(ISBN4-89610-705-5)

通算5回のオリンピックの取材経験を持つスポーツジャーナリストの白鷹隆幸氏が、アランタ・オリニピックで行われる26競技すべてについて、ルール、見どころ、エピソードなどをわかりやすくまとめた本。

詳しく正確な解説と、写真、イラストで構成され、オリンピック楽しむポイントだけでなく、スポーツの成り立ちまでわかり、競技を取材するためにも持っていると便利な一冊。

## 写真集「サンバの熱風 RIO」

泉五郎

発行、発売: (株) 情報センター出版局  
税込定価 3000円  
(ISBN4-7958-0993-3 C0070)



RIOカーニヴァルは毎年2月に行われる。一年のほとんどを慎ましく過ごしてきたカリオカ(リオっ子)が、蓄積したエネルギーの全てを3日4晩のカーニヴァルの間踊り続け發散させる。この、世界的有名な祭に魅せられ、通い、撮影を続いた泉五郎による作品集。写真を通して白熱した世界の感動が伝わってくる。

## 編集後記

赤木真二  
6月中旬、サッカーのヨーロッパ選手権、EURO 96の取材でイングランドにでかけました。期間中、好天に恵まれ、夏の日の午後の心地よい日差しの中で撮影を楽しむことができました。バスの中庭でビーターを麦茶のように飲んでいたのはいつの日か、東京に戻ると慣れないうまく作業が待っていました。

この春、AJPS の広報担当を命ぜられ、初めて AJPS NEWS の編集作業を任せました。我々4人の編集スタッフの第一歩は、この第1号をいかに上手に編集するかではなく、我々の会の存在をナチュラルに伝えられる NEWS 作りからスタートすることだと考えています。「日本スポーツプレス協会」という名称だけが一人歩きする事のないように、メンバー一人ひとりの仕事を紹介しながら、AJPSへの理解を深めていただきたい。と願いつつ編集作業を継続さればと思うのです。以前、サッカーのアルゼンチン代表チームを世界に導いたメノッティ氏は、サッカーという競技が進歩するのではなく、サッカーをする選手一人ひとりが進歩するから、サッカーが進歩するのです。氏のこの哲学、おおいに見習わせていただきたい、と思うこの頃です。

## 写真展案内

川津英夫

## 『LEFTALONE フィールドの天使たち』

スポーツという動の中に静をモノクロームで描写。川津氏の世界を堪能できる写真展。

福岡展: 福岡キャノンサロン 8月19日(月)~30日(金)(東京、大阪、名古屋は終了)

泉五郎

## 「サンバの熱風 RIO」

写真集とともに、泉氏撮影の躍動感溢れるRIOカーニヴァルの作品が鑑賞できる。

名古屋展: 名古屋キャノンサロン 7月15日(月)~26日(金)  
大阪展: 大阪梅田キャノンサロン 8月1日(木)~9日(金)(東京は終了)

## 築田純(パワーライフ)

## 「選ばれし者たちへ」

築田純氏が、所属するパワーライフのメンバーとともにスポーツアートを発表。オリンピックにも合わせ、様々な競技の写真を展示。

ミノルタフォトスペース新宿 7月16日(火)~29日(月)(20,21日は休館)

## 内ヶ崎誠之助

## 「アイスホッケーの世界」

アイスホッケーをライワークとして撮り続けているカナダ在住のフォトグラファー、内ヶ崎氏の写真展。

銀座富士フォトサロン 9月27日(金)~10月4日(金)

日本スポーツプレス協会会報  
1996年7月20日発行

編集・発行人 水谷章人  
編集スタッフ 山崎浩子 荒川雅臣 兼子慎一郎  
編集協力 竹内里摩子 朝霞電脳

## 編集・発行所

日本スポーツプレス協会(AJPS)  
〒112 東京都文京区音羽1-26-14 マルサビル401  
TEL&FAX 03-3946-9033

## 印刷所

昇美印刷(株)  
〒135 東京都江東区平野2-16-12  
TEL 03-3630-7681(代表)

本誌掲載記事、写真の無断転載を禁じます



日本スポーツプレス協会